

十二月四日

早朝歯医者。十一時半蔵門ダイヤモンドホテル待ち合わせ。昼食鈴木社長と麹町ひさごで。十三時大学。仮眠をとる。十六時目白日本フィンランド・デザイン協会理事会。栄久庵伊藤隆道その他。十八時五〇分神楽坂鳥茶屋。前の会合が早く終り、三〇分程も時間を持てあます羽目になった。変な待合風のエントランスでこのメモをノートしている。今日は東大の先生達と早稲田の先生達との会合である。良い方向にまとまると良いが。歴史の伊藤先生とは久し振りにお目にかかる。しかし、今日は長居は禁物で早めに失礼しよう。明日からカンボジア・ネパールへ向かうのだから。休息が必要なのだ。しかし悪趣味な小料理屋だなここは。程々の日本趣向くらい品格がないモノはない。十九時十分部屋に上がって待つ。二十一時過まで会談。とりたてて何かの問題を話し合ったわけではないが、こういう形式の会合はチョツと歴史的ではあるね。一二時過世田谷に戻る。

十二月五日

朝、ブノンペン、カトマンズ小旅行の為の荷作り。十一時地下へ。少し計りの打ち合わせ。本当はこんなクソ忙しい時に旅でもないのだが、五年後の事を考えるとこの旅は必然である。大事な岐路に対面した時は理屈で動くのは良くないのもう知っている。自然に、空虚な位に自然に自分の内に在る気持のなすがままに動

くのが良いのだ。カトマンズ盆地には宝が埋まっている予感がある。ズーツとそう思っていたのだから、イヨイヨ今度、その宝に向けて踏み出すのだ。宝がどんな形式を持っているのかはまだ視えない。ただ、キルティプールという山のような集落の保存運動だけではないというのは確信している。何が出てくるか、カトマンズ盆地の北端、ブツダニルカンタ遺跡はドイツの修復によって無茶苦茶になってしまった。あの事件はヨーロッパ文明のマイナズ面を象徴的に示していた。しかし、その現場を体験した僕は何かをそこから知る事ができたのだ。ヨーロッパ人の善意による努力によってブツダニルカンタのピポリの巨樹は切られた。あの場所は陰と暗闇を失い、光に満ちた明るく透明な場所になった。つまり、ブツダニルカンタにはアジアの近代化の問題が全て象徴的に表れている。

只今、十八時十分。これからバンコクまで飛ぶのだろうTha i航空の機体が、ラウンジの目前にある。変だよな、アメリカのボーイング社がブラックボックスの固まりとして作ったエアークラフトの、表面にたかだか変なマークやらが附加されて、それがナショナルアイデンティティになっているんだから。日本航空だとか、ANAとか、タイ航空、英国航空、パキスタン、その他諸々、しかし、国を代表する道具の象徴は全て米国製。これが近代の辿り着いたある種の峠なのだろうな。エアークラフトを作れない国の悲哀を眼の当たりにしているよね。現代の戦争は全て空中戦はアメリカ製の道具で成し遂げられるのだろうか。だとすれば、それは何が何と戦っている事になるのかな。

十二月六日

只今バンコク時間二十二時三五分。タイ航空七七三便の機中。

あと一時間半でバンコクだが機中が暑苦しくってセーターもシャツも脱いでしまった。十二月三日毎日新聞朝刊から友人の佐藤健の「生きる者の記録」が始まった。余命あと一年、つまり残り半年位と医者に宣告された佐藤健の生きる日々の記録だ。佐藤健からは「俺の事は書くなよ」と言われた事もあり、このメモにどれ程の事を書いて良いのかためらった事も度々あったが、倫理的にはこの連載が始まったのでタブーは無くなったのだろう。が、書けぬ事もある筈だ。出掛ける前に東大病院に寄ろうと考えたのだが止めた。ネパールに行くと言ったら、うらやましがられるだろうから。もう旅に出られぬ健さんに旅に出る話しは良くないと、みみっちい事を考えてしまったのだ。帰ったらネパールの手みやげを持って行かねばならない。ポドナツ八目玉寺のアンモナイトでも持ち帰るか。あと一時間程でバンコクに着く。沖縄計画への準備の為の予算が少し計りついたのでネパールから帰ったら沖縄へ行かねばならないな。生命体維持装置としてのコミュニティ・イメージを少しクリアーにするのが沖縄計画の目的だ。今二三時三五分。あと十分でバンコク着。

只今バンコク時間朝三時十五分。眠れないので起きて風呂を使ったりしてる。六時十五分にホテルロビーで集合という事になっているから二時間も寝れば良い。五時半、グッスリ眠れそうになったところで起床。眠い。八時十分の飛行機でプノンペンへ飛ぶ予定。五回目になるひろしまハウスレンガ積みツアーの今回の参加者は総勢二五名で小振りだ。年令も若くほとんどが学生である。暮の一番忙しい時をツアーに選んだからだろう。TG696でプノンペンに飛行中。昨夜は皆あんまり眠っていないだろうから今日のレンガ積みは午後からしよう。

ウナロム寺院十時過着。渋井小笠原両氏と再会。小休後ひろし

まハウスレンガ積み開始。十二時より十五時迄水浴び、昼食昼寝。十五時より十七時迄作業。汗はかくのだが、体調はいまひとつおもわしくない。

夕食後、二十二時いつものテラスにカヤを吊って眠る。

十二月七日

よく眠った。六時起床。朝食後、八時三〇分現場で小レクチャ。九時作業開始。それなりに参加学生も一生懸命やってくれている。遅々とはしているが少しずつ壁が積み上っている。十七時作業終了。台湾中原大学の白さん、バウハウス大学のセバスチャン、瓦職人の石塚君の仕事振りが目立つ。十九時前、中華食堂で皆と夕食。十九才の若い人と同席。面白かった。広島黒田氏がプノンペンで日本語教師としてボランティア中でお目にかかる。トレンサップ河沿いを歩いて帰る。プノンペンも僕の内では何だか日常生活の一部のように組み込まれてしまった。常に新鮮である事は至難である。どうも体調が元に戻らない。

只今二十時四〇分汗がジワーツと湧いて少し不快。乾期なのに湿気が多い。

十二月八日

昼の便で小笠原氏とバンコクへ。バンコク空港で安藤を拾い、汽車で市内へ。駅前の安宿風ホテル。小笠原氏の不思議な友人と会う。オリエンタルホテルのテラスで花火を見て、ヤワラーで食事。

十二月九日

朝汽車で空港までと試みるも、時刻表にあるべき筈の汽車は無

し、タクシーで空港へ。小笠原氏おすすめの空港中従業員食堂で朝食。カトマンドウへ飛ぶ。機中より遠くヒマラヤの峰々を眺める。昼過カトマンドウ空港着。何故だか下り気味でトイレへ駆け込む。空港で小笠原氏の長年の友人であるジュニーに会う。二十数年前に世界のトップモデルであつたらしい男だ。このジュニーが今回のキルティプール計画のキーパーソンになる。ヤク&イエティホテルまでタクシー。早速様々な人物に紹介される。トリバン大学教授、ジュニーのスタッフ、キルティプールの役人達等すぐにキルティプールの丘に車で上る。何ができるのだろうか。夕方カトマンドウに戻り、歓迎パーティー出席。教育スポーツ大臣その他キルティプール市の要人達、実業家等、ジュニーの人脈の広さをしのばせる。大臣スピーチ、私もスピーチしたりで気が抜けない。ホテルに戻り少しくつろぐ。小笠原氏と同室。小笠原氏の荷物は小さな手さげ袋一つで、全く気軽なスタイルを押し通している。筋金入りのヒッピーだなこの人は。

十二月十日

早朝ジュニーがホテルに来て、共にカトマンドウ旧市街を歩く。変わってしまったような変わらぬような、変な気持ちを持ち続けている。カトマンドウ寺院のチャイ屋で実にうまいチャイを飲んで、やっとホッとす。ジュニーのオフィスで又、様々な人に会う。もう誰が誰だか解らぬママだ。

地方自治大臣にお目にかかる。

午後、再びキルティプールへ。キルティプールの市役所オフィスで打合わせ。又、スピーチ。色々と贈り物をいただく。打合わせの後、少しゆっくり集落を歩く。夕方キルティプールは素晴らしく、ここでのワークショップが適切である事を確信する。南の

ストウーパに上るとヒマラヤがピンクに染まって見えた。年甲斐もなく胸が震えた。夜、キルティプール市内の食堂の二階で宴会。唄まで出て楽しくやった。ホテルまでキルティプールの人々に送っていただく。

十二月十一日

終日、スワヤンブナート、ボドナハ、パタン、パシュパティナート、マザーテレサの家等を見て廻る。夕方、パタンの外れから眺めたヒマラヤが圧巻だった。

十二月十二日

カトマンドウ・ゲストハウスを早朝出て飛行機でポカラへ。機中からのヒマラヤは何をか、言はんや。死んでもイイとは言わぬが、アアとは言う。

ポカラ着、車で湖の近くのレストランで食事。その後、何かの集会に出てジュニーの母親を遠くに見た。マチャプチュレに雪は少ない。午後、車でノーダラへ。尾根の上から白い巨峰の連続を見る。ノーダラでジュニーがアテにしていたロッジはすでに無く、しかし別のロッジに泊ることになる。午後中ジーツとヒマラヤを眺めていた。夕食はうまいカレーだった。夜半月明りのヒマラヤを見る。言葉もない。

夜明けのヒマラヤも眺めた。

十二月十三日

車で三〇分程走り、ナワルコットへの入口へ。記憶を少しづつ取り戻し始め、この径が二〇数年前のラウンド・アンナプルナ・トレッキングの最後に歩いた径であることを鮮明に思い出す。得

も言えぬ感慨に落ち入った。美しい径であった。一時間程歩いて、ナワルコットへ。昔、ここで休んだことがあるピポリの樹の下で再び休む。陶然たる時間。ヒマラヤの巨峰。ネパールの子供達、ジュニー、小笠原氏、等々。体も少し元気になった。そんな事信じられるわけも無いが山からエネルギーをもらっているのかも知れない。

午後遅くの飛行機でポカラからカトマンドウへ。再びカトマンドウ・ゲストハウス泊。

十二月十四日

朝、スワヤンブナート近くの家を訪問。カトマンドウ在住の日本人女性の招待で朝食をいただく。午後の便で小笠原氏とカトマンドウを去る。今回の旅では小笠原氏と十日間一緒であったが、助かった。ジュニーとも又、来年会うことになるだろう。バンコク空港で小笠原氏と別れ、深夜の便で成田へ。

十二月十五日

朝、成田着。世田谷村に戻る。終日、ボーツとして暮らす。今日一日は駄目だろう。室内原稿書く。

十二月十六日

朝ミイティング。まだ頭が東京のサイクルじゃない。午後、思い立って東大病院へ、佐藤健を見舞う。何だか「生きる者の記録」が大きな反響を呼んでいるようで、とりあえずは良かった、が、毎日新聞はチョツとやり過ぎでもある。来て良かった。ベシーの菅原から送られてきた、マイルスデービスのCD等届ける。佐藤健、食べられず、げっそりやせてしまった。哀しい。話しな

から、時々眠ってしまう状態だ。

十六時、東大鈴木研究室。安藤忠雄、鈴木博之と鼎談。伊東忠太について。十五日に藤森の本を一日読んでいたので、マ、少しは何とかなったかな。

十二月十七日

というわけで、今、真夜中。眠れぬママにこのメモを書いている。ネパールの事は、実は、もう十八日だが、今書き終わったところ。やっぱり日記はその日、その時に書かねば駄目だ。しかしメモをつけるエネルギーが無かった。

今日、ベシーの菅原から何枚かのコルトレーンが着く筈で、明日それを届けに東大病院へ行く。コルトレーンが聴きたいと佐藤健のたつての望みなのだ。

ここに、三日僕の思考の方向が非常に大事なことになるような気がしている。何故か仕切りに胸騒ぎがするのだ。